

一般国道26号線第二阪和国道建設事業に伴う

久保田遺跡発掘調査報告書

—大阪府阪南市自然田所在—

1999年8月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター



久保田遺跡 調査前 全景

序 文

久保田遺跡は大阪府阪南市久保田に所在する遺跡であります。

本報告は一般国道26号線第二阪和国道建設の久保田地区を通過する部分に該当し、その範囲の発掘調査をまとめたものです。

久保田遺跡は昭和63年阪南市教育委員会によって遺跡の存在が明らかとなり、今回当センターの発掘調査により、近世の知跡や中世の河川跡や井戸を検出することが出来ました。旧山中川が現在の位置より北側を蛇行し、旧地形が明らかとなりました。このことから阪南市が発掘調査を実施した中世の平野寺跡において検出された居館跡は、自然地形によって制約を受け築造されていること等が判明し、中世期の環境の解明に大きな資料提供をすることが出来ました。一例一例の発掘調査によって得られる資料の積み重ねが、阪南市の歴史を解明する上で重要な役割を果たしていると確信しております。

本調査を実施するに当たりまして、地元のみならず阪南市二国推進室のご理解とご協力、また建設省近畿地方建設局浪速国道工事事務所並びに大阪府の関連諸機関のご努力によって進められたことに深く感謝の意を表します。今後とも文化財に対しより一層のご理解を賜り、当センターの事業に変わらぬご支援を賜りますようお願いいたします。

平成11年8月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター
理事長 坪 井 清 足

例 言

- 1 本所は第二阪和国道（国道26号線）建設工事に先立つ、久保田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本調査地は、大阪府阪南市自然田地内に所在する。
- 3 本調査は建設省近畿地方建設局浪速国道工事事務所の委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと、現地調査を助大阪府文化財調査研究センターが実施した。
- 4 本調査は、当センター調査部長井藤徹、参事兼調整課長中西靖人、調整係長福田英人、南部調査事務所長藤田恵司の指示のもとで、調査第一係長西口陽一・技師服部美都里が担当した。また、遺物整理は整理係長石上幸子の協力を得、遺物の写真撮影は主任技師立花正治が行った。
- 5 現地調査は、平成8（1996）年4月8日から同年11月30日まで実施した試掘調査の結果を受け協議のすえ、平成8年12月2日から平成9年3月31日まで調査を実施した。引き続き南部調査事務所で整理作業を実施し、平成9年4月30日を以て報告書の作成作業を完了した。
- 6 本書で作成した写真図版資料・出土遺物は、すべて南部調査事務所に保管している。
- 7 調査に当たり、阪南市二国推進室及び阪南市教育委員会社会教育課三好義三氏・田中早苗氏・上野仁氏の協力を賜った。また、大阪市教育委員会文化財保護課堀江門也氏・広瀬和雄氏・上林史郎氏、泉南市教育委員会飯屋喜一郎氏のご教示を得た。
発掘・整理作業には以下の協力を得た。大井裕美子・福山綾・和田しづか・角野尚代・角野孝子・岡田竜彦・松井晴美・久禮孝志・加茂幸彦・小川佐起子・黒川敦美。記して感謝の意を表したい。
- 8 本書の編集は西口・服部が行った。

凡 例

- 1 本書のレベルは全てT・Pを用いている。
- 2 本書で用いる座標はすべてkm単位である。
- 3 方位は国土座標第VI系の座標北を示す。
- 4 土器の断面は、須恵器・須恵質は黒塗り、瓦質はスクリーントーン、その他は白抜きで表示した。
- 5 実測図の縮尺は、遺構に関しては変則的である。
遺物は石器を1/1、その他は原則として1/3である。

久保田遺跡発掘調査報告書

本文目次

序文

例言・凡例

第Ⅰ章 遺跡の位置と環境	1
第Ⅱ章 調査に至る経過	1
第Ⅲ章 調査結果	4
第1節 調査方法	4
第2節 基本層序	4
第3節 遺構と遺物	
中世 流路	7
石列	9
井戸	11
落ち込み	12
段落ち	12
近世 水路	13
鋤溝	13
第Ⅳ章 まとめ	14

挿図目次

第1図 久保田遺跡位置図	2
第2図 調査区位置図・地区割図	3
第3図 基本層序	5
第4図 遺構全体図	6
第5図 流路1 出土遺物実測図	7
第6図 流路2 出土遺物実測図	8
第7図 流路3 出土遺物実測図	9
第8図 井戸・石列1 平・断面図および出土遺物実測図	10
第9図 石列2 平・断面図	11
第10図 水路 平・断面図および出土遺物実測図	12

表目次

表1 出土遺物一覧表	15
------------	----

図版目次

図版1 調査区全景
図版2 遺構（流路・井戸・石列）
図版3 遺構（井戸・石列・落ち込み）
図版4 遺構（鋤溝・試掘トレンチ）
図版5 遺物（流路出土）
図版6 遺物（流路・井戸・水路出土）

第I章 遺跡の位置と環境

久保田遺跡は大阪府阪南市自然田に所在する。

昭和58年に供用を開始した第二阪和国道(国道26号線)の既存開通区間の南端部分で、府道南海線との交差点南西側に当たる。

南東部に和泉山脈(大阪層群)を控え、大阪層群により形成された丘陵地が北西方向に展開している。これらの丘陵地は金熊寺川・山中川・菟砥川の河川が蛇行する事によって形成された段丘面となっている。3河川は調査区の北西側で合流し、男里川となって大阪湾にそそいでいる。

調査地周辺はかねてより遺物の散布が知らされていたが、昭和63年に阪南市の分布調査によって遺跡分布図に記載され埋蔵文化財包蔵地として周知されるに至った遺跡である。古代～近世にいたるまでの各時期の遺物が表面採集される他、夥しい量のサヌカイト製の石器の散布が認められる。

遺跡範囲は金熊寺川と山中川の蛇行によって形成された狭小な平坦地の内、山中川に近い東西80mと南北100mが遺跡範囲と推定されている。現状では畑と水田が大部分をしめ、山中川右岸はほぼ全域が耕地化されている。

阪南市は平成9年現在、70の遺跡が周知されている。本遺跡周辺は市域においても遺跡の集中度が高く古くから土地開発の盛んであった地域と考えられる。久保田遺跡東側には古墳時代後期の高田山古墳群の存在が知られている他、西側には当センターが試掘した縄文時代～弥生時代の集落と推定している向出遺跡、南側には古代以降の集落跡である高田西遺跡、北側には古代～近世にかけての寺院跡や居館が検出された平野寺(長楽寺)跡の存在が確認されている。

また、当該地の字名には「明心寺」「高水・こうずい」等が残っており、字名の成立時期を解明すると共に、本遺跡の性格を検討する上で興味深い視点を与えている。

第II章 調査に至る経過

第二阪和国道は、旧紀州街道をもとに大阪湾岸に沿って造られ、現在の府道大阪和泉南線(13号線)のバイパスとして計画された道路である。堺市から和歌山を結ぶ延長約53kmの計画路線の内、昭和58年には堺市から阪南市までの約33kmが供用されている。平成5年には、関西新空港開港に際して開通した近畿自動車道と和歌山線(阪和自動車道)と共に、地域社会の重要な基盤を形成する大阪南部の幹線道路となっている。

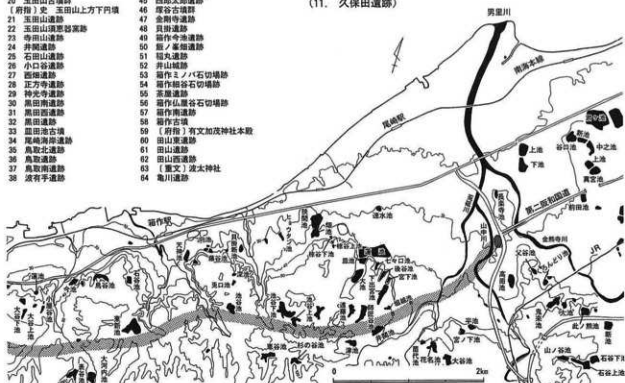
昭和63年に阪南市域と岬町域の都市計画決定がなされ、未着手約20kmの第二阪和国道の延伸計画が事業化された。平成8年度には工事に先立ち大阪府教育委員会の指導のもと、当センターが道路予定地の阪南市遺跡群の調査を実施することとなった。

同年4月～6月に路線予定地の西側と東側に設定した試掘トレンチ調査3箇所によって、中世～近世の耕作面や落ち込み等が検出された。包含されている遺物は古代の土器と中世の土器・瓦等で、周辺に集落・生産域・寺院等の存在が想定された。この結果を受け協議を行ったすえ、平成8年12月～平成9年3月まで道路予定地部分の発掘調査を実施すると共に、遺物整理作業及び報告書の作成を行い、すべての作業を完了した。



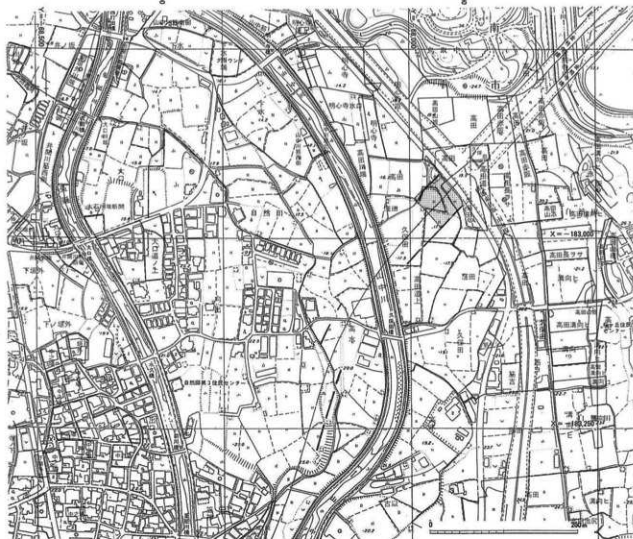
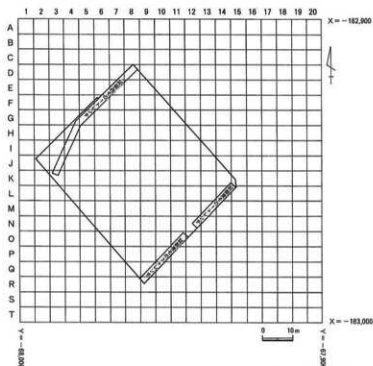
- 1 榎島遺跡
- 2 尾崎清水遺跡
- 3 馬川北遺跡
- 4 馬川遺跡
- 5 下北遺跡
- 6 下北遺跡
- 7 内畑遺跡
- 8 室堂遺跡
- 9 平野寺(長壽寺)跡
- 10 向山遺跡
- 11 久保田遺跡
- 12 高田遺跡
- 13 高田山古墳群
- 14 高田山遺跡
- 15 高田南遺跡
- 16 和泉鳥取遺跡
- 17 山中溪遺跡
- 18 向山遺跡
- 19 自然山遺跡
- 20 玉田山古墳群
- 〔府指〕史 玉田山上下方墳
- 21 玉田山遺跡
- 22 玉田山原跡遺跡
- 23 寺田山遺跡
- 24 井筒遺跡
- 25 石田山遺跡
- 26 小口谷遺跡
- 27 西畑遺跡
- 28 正方寺遺跡
- 29 神光寺遺跡
- 30 高田南遺跡
- 31 黒田西遺跡
- 32 黒田遺跡
- 33 黒田池古墳
- 34 尾崎海岸遺跡
- 35 鳥取北遺跡
- 36 鳥取遺跡
- 37 鳥取南遺跡
- 38 須有手遺跡
- 39 西鳥取遺跡
- 40 成道跡
- 41 三味谷遺跡
- 42 三外五合山遺跡
- 43 阿波谷遺跡
- 44 島畑石切場遺跡
- 45 西脇太郎遺跡
- 46 塚谷古墳群
- 47 金剛寺遺跡
- 48 貝塚遺跡
- 49 福作寺遺跡
- 50 野ノ墓遺跡
- 51 福丸遺跡
- 52 井山遺跡
- 53 福作三ノハ石切場跡
- 54 福作細谷石切場跡
- 55 高麗遺跡
- 56 福作山原谷石切場跡
- 57 福作南遺跡
- 58 福作古墳
- 59 〔府指〕有文加次神社本跡
- 60 田山遺跡
- 61 田山遺跡
- 62 田山西遺跡
- 63 〔置文〕波太神社
- 64 亀川遺跡

(11. 久保田遺跡)



第1図 久保田遺跡 位置図

大8-2-11 1-21



第2図 調査区位置図・地区割図

第三章 調査結果

第1節 調査方法

道路予定地部分の両肩をトレンチによる試掘調査を実施していたので、埋戻した掘削土と現代耕作土を機械掘削し、それ以下の各層は地山面まで人力掘削を行った。

遺物は、国土座標第Ⅵ系をもとにした5mメッシュの地区割図を作成して取り上げた。調査区が座標北に対してほぼ45度に振っている為、水路の関係で東西方向に造成されている水田や一つのまとまりを持った鋤溝群は、各段ごとの面で取り上げている。

検出された遺構は、全体遺構実測作業はヘリコプターによる写真撮影と区化(1/20・1/100)を委託業務で行い、遺構断面と土層断面はすべて1/20に統一して実測した。写真撮影は35mmと6×7カメラを適宜使用して撮影を行った。

発掘調査終了後、大阪府の立会を受け終了した。掘削深度を再確認後、写真用足場の撤去と掘削土埋め戻し作業を行い、3月24日現地での作業を完了した。

第2節 基本層序

久保田遺跡は現山中川の右岸50mに位置し、河川の段丘上に立地している。

基本的な土層堆積状況は、第1層現代耕土・床土、第2層近世耕土・床土、第3層中世包含層、自然河川(旧山中川)の流路、地山層である。

平成5年に山中川の堤が完成するまでは、一帯は豪雨の度に増水する氾濫原であり数年に一度は大規模な水害の頻発する地域であった。第二阪和国道とその道路に直交して接続する府道東鳥取南海線の路面高はT・P+20.2m、府道に平行して設置されている側道市道東鳥取63号線の路面高はT・P+18.5m付近に当たる。さらにこれら道路直下に位置する調査区付近の現地表面はT・P+16.9m付近に当たる。山中川の川底が調査区付近では14~17mであることと比較すると、かなり低いことが窺われる。

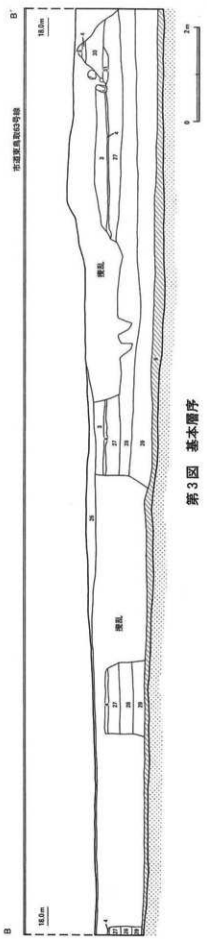
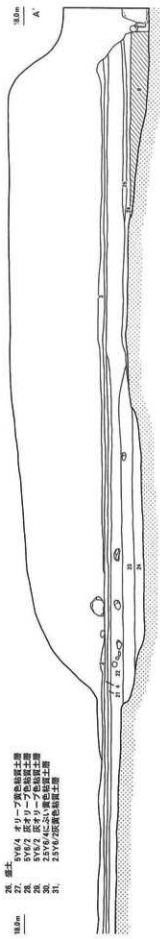
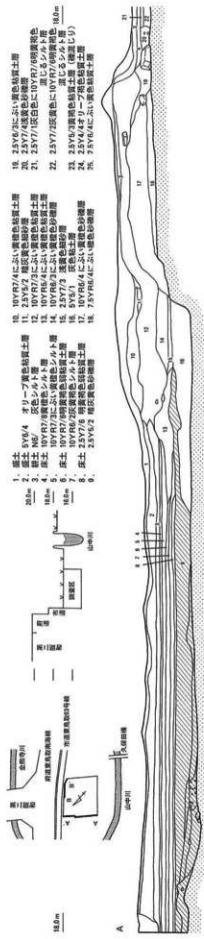
調査区の現況は水田であるが、東西方向に走行するU字溝により南北に二分されている。個々の水田の形状は不定形であるが、南北ともに現地表面はT・P+16.9m付近に当たりほぼ水平である。

現地表下は大半が盛土であり、その直下の灰褐色シルト層上面が第一遺構面に当たる。第一遺構面はその全面が近世耕作面であり、水田或いは畑に伴う鋤溝群が検出されている。東側の最も低い地区ではこれらの耕作土が3時期以上にわたる耕作面により形成された状況が確認された。

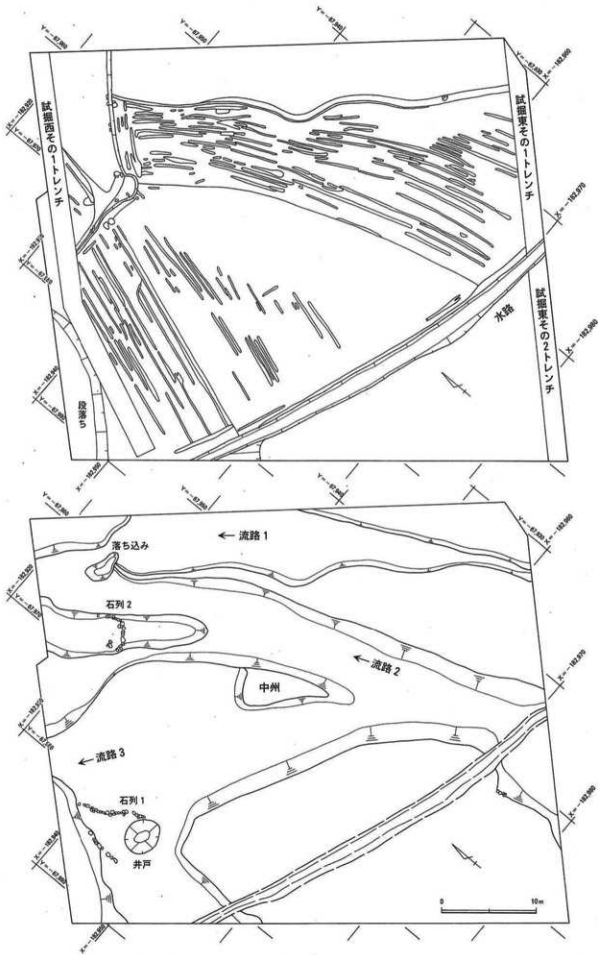
国道・府道・市道設置に際し西側はかなり改変を受けているが、わずかに遺存する部分ではほぼ同様の層序が確認され、数次にわたる耕作面が形成されていたことが窺われる。灰褐色シルト層は層厚5~10cmを測る。

灰褐色シルト層直下は、マンガン沈着の著しい灰色シルト層群が層厚20~60cmで堆積しており、出土遺物から中世包含層と判断された。これら灰色シルト層群直下で砂礫層群に至る。これら砂礫層上面が第二遺構面に当たり、鎌倉時代に埋没したことが窺われる井戸や水路が検出されている。これを前後する時期には河川の氾濫が著しいものと見られ、中世包含層に当たる灰色シルト層群及び直下の層位では多量の砂礫が包含されており、急激な堆積により形成された状況が窺われる。

第二遺構面下の層位は、山中川流域における本流性堆積物とみられ、段丘上全面が砂礫層で形成されている。これら堆積物には遺物の包含は認められず、地山層と判断された。シュートバー状の小規模な起伏が随所に認められ、調査区周辺は厳しい自然環境により形成されたことが窺われる。



第3図 基本層序



第4図 遺構全体図(上・第一遺構面 下・第二遺構面)

第3節 遺構と遺物

流路1

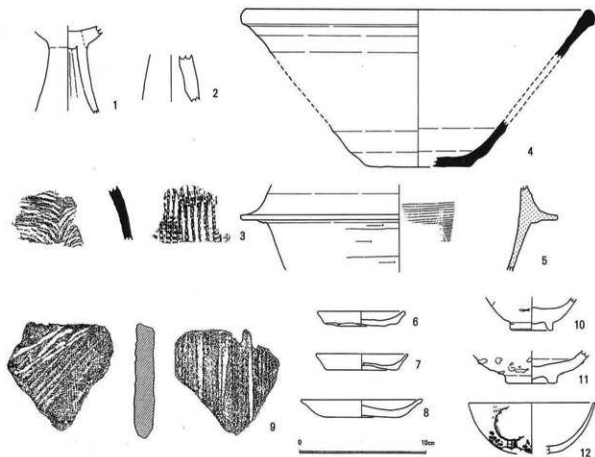
調査区東部で検出された。北東端で幅8m以上、深さ1mあり、その南側の肩のみが東西に蛇行して検出された。

調査区北西隅では更に一段深くなり、調査区北隅では一段深くなった部分が再び検出されたので、両者は一続きのものかと考えられた。流路1の南側の肩と流路2の北側の肩は調査区北端では互いに接しており、接する部分では長さ13mほどの小さな島状になって残っていた。

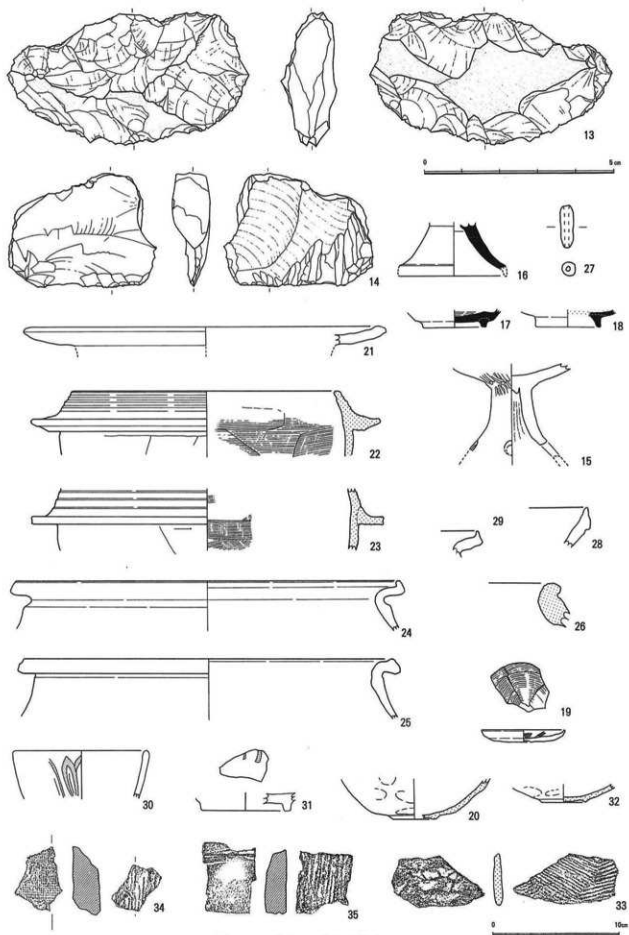
流路1の埋土は灰褐色の粘質土で、弥生時代後期の高杯片や古墳時代後期の須恵器杯蓋片などの他、鎌倉時代の瓦器碗、土師器小皿、羽釜、須恵質ねり鉢、瓦片などが含まれていた。

流路2

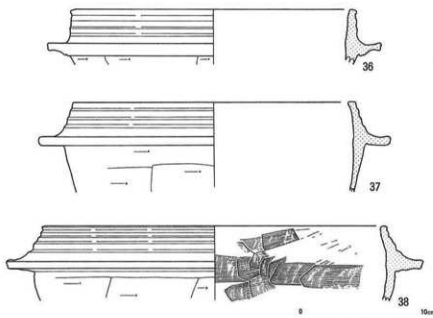
調査区中央で検出された。流路2は、調査区南端から西にかけて大きく曲がっていた。途中、中州(東西9m、南北4m)が三角形に検出され流路が北側と南側の二つに分かれていた。調査区南端では幅17m深さ0.4mあり浅く幅広い流路であったのが、調査区中央では幅11m深さ0.5mとやや狭くなっている。中州より下流の北側の流路は、流路2の本流で幅7.6m深さ0.6mあった。特に北側流路の北側肩部は、流路の曲がり角に当たるため水流によって大きく地山が抉られていて、急角度な岸部となってい



第5図 流路1 出土遺物実測図



第6图 流路2 出土遺物実測図



第7図 流路3 出土遺物実測図

た。その北側流路の北西部に更に一段深くなる流路が検出され、その中央部に石列2が検出された。石列2の南側に幅7.9m深さ0.3mの流路があった。流路2の本流よりは30cm程低い位置に検出された。浅く幅広い流路で、西に向かって流れていた。流路の底には、灰褐色の細砂や灰色の小石を含んだ砂礫等の幾条もの小流路跡が検出された。この流路の地山面直上からは、磨滅した弥生時代後期の甕・

高杯片や古墳時代後期の須恵器高杯脚部片、平安時代前期の須恵器杯・内黒の土師器碗・瓦器碗・土師器小皿・青磁碗片等が出土して、最終的には鎌倉時代に埋もれた流路跡であることが判明した。他に珍しい遺物としては石墨片岩製の石棒(?)片やサヌカイト製スクレイパー・フィゴの羽口・土鍾等があった。

流路3

調査区西端で検出された。幅7.7m深さ0.5m。南から北に流れていたと推定される小さな流路跡である。埋土は砂礫や粘土で、人頭大の石を多数含んだ地山直上からは鎌倉時代の土師器羽釜片が出土した。流路3も流路2同様、鎌倉時代の河川跡であることが判明した。

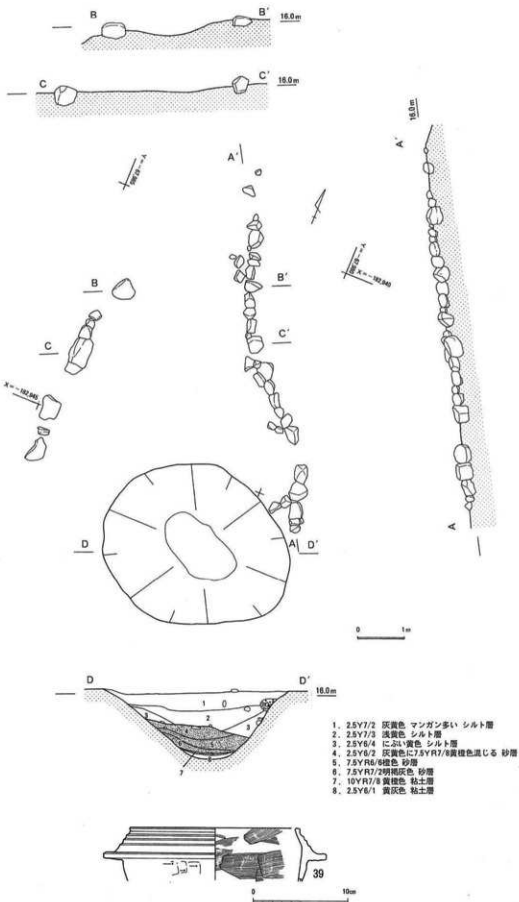
石列1

流路3の西部で井戸に接して検出された。石列は東側の長さ1.7mにわたる直線的な部分と、35cm空いて始まる長さ4.9mにわたる弧状の部分とからなっている。いずれも最大で径35cmまでの人頭大の石を、一列ないし部分的には二列に平面的に並べただけのものである。石の向きは、共に南西側に前面を揃えて並べられていた。南西側は深さ15cmほど下がって溝になっていたいたのでその部分用の緑石と考えられた。

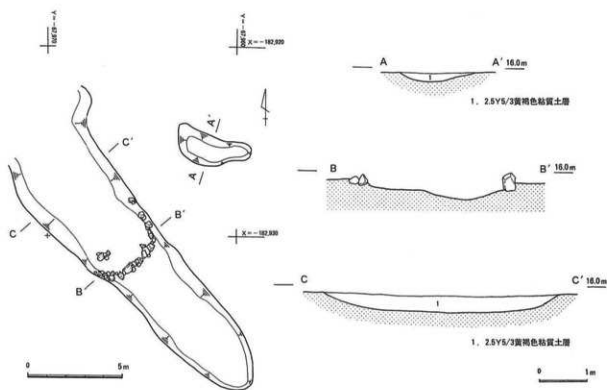
石列の時期は、石列近くの包含層から鎌倉時代の土師器羽釜片等が出土したので、その時代の遺構と考えられた。

石列2

流路2北側流路の北西部で検出された流路は、その中央部が幅4.6m長さ17.4mにわたって一段と深くになっていた(深さ0.4m)。石列2は、その一段深くなった部分のほぼ中央部(調査区の北西壁からだ東に8.4mの位置)で流路に対して直角の方向に長さ7.3mにわたって検出された。石列の両端部は緩やかに、かつての流路の下流側に曲がっており、岸部に接して終わっていた。



第8図 石列1、井戸 平・断面図および出土遺物実測図



第9図 石列2、落ち込み 平・断面図

石列は流路の底から15~20cm浮いた状態で検出された。石の積み方は、長さ15~50cm程の角の丸い河原石を上下に2~3段積み重ね、前後には2~3個並べて列を構成していた。石列の中央部には幅17cmの間の空隙が存在した。石列の他の部分では、石どうしが互いに噛み合うように積まれたり並べられていたため、この空隙部分は意識的に空隙部分として作られたことが明らかであった。かつての自然河川内の流路を堰き止め、その中央の一箇所のみを空けてその部分から水を下流に流すような目的で作られた石列と考えられた。

土地の古老に伺った話では、石列の空隙部分の下流側にモンドリなどを設置すると魚や蟹が自然に捕れるとのことなので、この石列は鮎のような石列と解釈するのが妥当と考えられた。戦前までは長さ15cmほどのアユやハイコ・ズガニ・ウナギ等もたくさん山の中川や寛砥川で捕れたとのことなので、かつての山の中川に相当するこの流路中に検出された石列もそれら川魚を捕獲するための漁労施設と考えられた。

石列の時期は、近くの流路埋土中から古墳時代後期の須恵器や時期不明の土師器細片が1点ずつ出土しているのみなので明らかでないが、地山直上ではないので流路2の埋没時期の鎌倉時代のものと考えられた。

井戸

流路3の南西部で検出された。東西4m南北3.4m深さ1.5m。平面は楕円形。底はなだらかで枠はなく素掘り。人頭大の石を多く含んだ固い砂礫層を掘りくぼめていた。現在では、水脈が変わったためか湧き水はなかった。埋土は黄褐色や青灰色の粘土・砂礫土等で、周囲からの流れ込みによるものと考えられた。底から50cm上の位置から時期不明の土師器細片が1点出土した。埋土最上層からは、鎌倉時代の土師器羽釜片が1点出土した。従って、井戸掘削年代は鎌倉時代以前と考えられた。

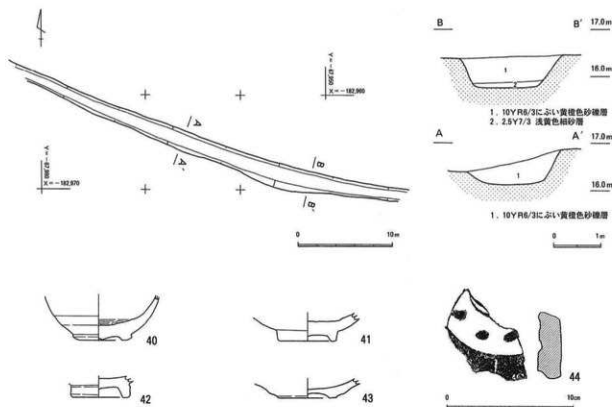
落ち込み

流路1の北西隅で検出された。長さ4.1m幅1.8m深さ0.3m。平面は楕円形。底はなだらか。内部には人頭大の石を中心とした自然石が多数包含されていた。埋土は汚れた黄褐色の粘質土で、遺物が出土しなかった。遺構が自然の営為によるものか明らかでなかった。

段落ち

調査区西端角部は一段深く、西側に落ち込んでいた。東西6.4m南北16.4mの三角形の落ちで、深いところでは1mにも達していた。底はでこぼこしていた。鎌倉時代の流路2や流路3が大きく削られている所からすると、鎌倉時代以降水流によって大きく削られたものである事が推定された。その削られた部分には灰褐色の粘土層等が厚く堆積していた。底部から40cm上で一枚、60cm上で一枚、70cm上で一枚酸化鉄の厚く沈積した水田の床土層が認められた。いちばん上の層が近現代の層で、二枚目が江戸時代、三枚目が戦国時代かと推定された。段落ち部の最下層からは、土師器の細片が2点出土したのみで詳しい時期は不明であった。

なお、この段落ち部の肩部上面には幅1.4m高さ0.4m断面蒲鉾形に厚く砂礫が盛られていた。土手状の高まりがほぼ南北に存在した様子である。土手の東側には幅1m深さ0.25mほどの水路も設置され、埋土中から江戸時代の陶磁器片や瓦片等が出土したことにより、江戸時代の水路並びに土手である事が判明した。その西側にはさらに調査区外へと広がっていた様子である。ちなみに、この土手状の高まりは、砂礫の上に20~30cmも土が盛られ、現在も里道として使われていた。この里道を境として、東側の水田と西側の水田とは高さにして40cmもの差があるので、このわざわざ盛られた土手状の高まりは調査区南方を流れる山中川の江戸時代の堤であった可能性も考えられた。



第10図 水路 平・断面図および出土遺物実測図

水路

調査区南端部で東西方向に検出された。溝の幅は広い所で2.1m深さ70cmであった。断面形は扁平なU字形で、ところどころ乱杭が打たれていた。埋土は石を多く含んだにぶい黄橙色の砂礫土で、江戸時代の陶磁器碗片等が少量出土した。この水路は、緩やかに南側に曲っており、水路を境とした南側と北側の地山面の高さは高い所では0.6mもの高低差があった。近世にこの調査区一帯が水田に造成された際、田と共に掘削された水路と考えられた。

なお、この水路は埋れた後も改修されて使われ続け、現在ではコンクリート製のU字溝となって残っていた。

鋤溝

調査前までは、調査区は水田であった。南側が高く、北側が低かった。田は一枚ごとに段差があり、お互いが独立していた。

調査区南部の水路より南側の田は、現代耕土・床土層を除去すると直ぐ礫層が現れ、無遺構地帯であった。遺物も出土しなかった。

水路の北側、調査区の西端部は幅4mの間、田が一段下がっていた。現代耕土・床土層を除去すると粘土層が現れたが、遺構・遺物は検出されなかった。東側の広い田との境には、下層の礫層の土手の上面が現れていた。

礫層の土手部分から東側に8mの間には、幅20～30cmの鋤溝が南北方向に18本平行して検出された。鋤溝の長さ、残存状況は一定しなかったが、方向が一致すると密集状況から、これはこれで一枚の田の痕跡と考えられた。

水路の南側と調査区の中央部分は、南北方向の鋤溝が20本断続的に検出されただけである。

調査区の北東から南東部には、狭い所で幅8m、広い南東端では20mもある扇状の範囲に鋤溝群が検出された。この鋤溝群は調査前までは同位置にあった水田の下層で検出されたものである。鋤溝埋土中には、須恵器・土師器片と共に江戸時代以降の陶磁器細片が含まれていたため、江戸時代以降のものと考えられた。検出された鋤溝は、北から南東にかけて緩やかに曲がっているものが多く、10～27本が平行したり重なったりして検出された。

この鋤溝群の北側には、幅60cmほどの礫層が充満した暗渠状の溝が検出された。溝はところどころで曲がっており直線的ではなかった。下層を掘削すると鎌倉時代の自然河川の土手状の岸に相当したので、暗渠や溝等ではなく、下層の遺構がこの面に現れていたものである事が判明した。また、この鋤溝群の南側のラインは、下層で検出された流路2の肩とほぼ重なっていたので、この鋤溝群は下層の自然流路の埋土上面に掘削されたものである事が明らかとなった。鎌倉時代の自然河川の形状が、江戸時代～現代の田畝の形にも影響を与え続けた結果と考えられた訳である。

この鋤溝群の北東側には一切鋤溝が検出されず、その東側で河原石の塊が数箇所認められただけである。河原石の中には大人が一抱えにしても容易に動かせないほどの大きさの石も混じっていたが、石の塊の意味はよく分からなかった。

調査区の北端では幅9mの田が一枚検出された。江戸時代以降に削平されたものである事が土層断面の観察結果から明らかであった。その南西端にのみ鋤溝が4本部分的に検出された。この田畝の肩部にも部分的に河原石の塊が数箇所認められた。田畝の片隅に置かれた石の塊は、境界石のような用途が考えられるのかもしれない。

第IV章 まとめ

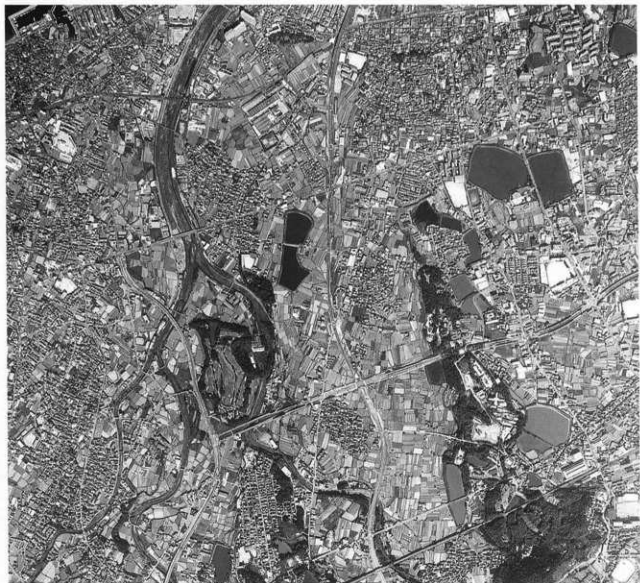
久保田遺跡を発掘した結果、以下の事柄が判明した。

- 1 旧の山中川と考えられる、鎌倉時代の自然河川跡を検出した。
- 2 自然河川跡は流路1・流路2（中州・北側流路・南側流路）・流路3に分かれ、それぞれ鎌倉時代の土器が出土した。
- 3 流路2の北側流路からは、^瓦駄のような石列2を検出した。
- 4 流路2の南側流路からは、水路の縁石と思われる石列1及び井戸を検出した。
- 5 時期不明の落ち込み、鎌倉時代以降の段落ち、江戸時代の水路・鋤溝等を検出した。
- 6 流路1・流路2からは、弥生時代後期の土器、古墳時代後期の土器、平安時代の須恵器・土師器等が出土し、調査区よりそう遠くない上流域にそれらの遺物を包含する遺跡の存在したことが推定された。
- 7 流路1・流路2・包含層等からは中世の瓦が多数出土した。調査区付近の上流域に寺院跡の存在が推定された。

表1 遺物一覽表

No	器種	座標	遺構	図版	写真	法量 (cm)
1	弥生土器 高杯	大B-2-111-21L14	流路1	5		残高 6.8
2	弥生土器 高杯	" K13	流路1	5	5 a-1	残高 3.7
3	須恵器 甕	" F9	流路1	5		測定不可
4	須恵質ねり鉢	" H11	流路1	5	5 a-4,5	口径推27.4 器高推12.3 底径推11.2
5	瓦質 羽釜	" K13	流路1	5	5 a-9	口径推25.0 残高6.7
6	土師器 小皿	" I12	流路1	5	5 a-7	口径推7.0 器高1.15 底径推3.9
7	土師器 小皿	" H11	流路1	5	5 a-6	口径推7.35 器高1.3 底径推5.6
8	土師器 小皿	" J12	流路1	5		口径推9.6 器高1.4 底径推6.0
9	瓦	" G10	流路1	5	5 a-10	厚1.5
10	陶磁器 碗	" F9	流路1	5		残高2.5 高台径3.45
11	陶磁器 碗	" L14	流路1	5		残高2.6 高台径推4.1
12	陶磁器 碗	" F9	流路1	5		口径推10.0 残高4.0
13	スクレイパー	" O11	流路2	6	5 c-2	長3.4 幅0.4 厚1.15
14	不定形刃器	" O11	流路2	6	5 c-1	長3.0 幅4.0 厚1.0
15	弥生土器 高杯	" P11	流路2	6	5 b	残高7.0
16	須恵器 高杯	" H8	流路2	6	6 c-1	残高3.7
17	須恵器 杯	" M11	流路2	6	5 d-4	残高1.4 高台径推5.1
18	黒色土器 碗	" M11	流路2	6	5 d-3	残高1.35 高台径推5.15
19	土師器 小皿	" L11	流路2	6	5 d-5	口径推6.6 器高0.95 底径推3.1
20	瓦器 碗	" H9	流路2	6	6 a-3	残高3.2 高台径推3.4
21	土師質 埴	" G5	流路2	6	6 c-3	口径推28.7 残高1.4
22	瓦質 羽釜	" G5	流路2	6	6 c-4	口径推21.1 口径推27.4 残高5.15
23	瓦質 羽釜	" G5	流路2	6	6 c-5	口径推27.9 残高4.35
24	土師質 羽釜	" K10	流路2	6	5 d-7	口径推30.2 残高3.95
25	土師質 羽釜	" K10	流路2	6	5 d-6	口径推29.2 残高4.75
26	瓦質 甕 淡焼	" H9	流路2	6	6 a-4	残高3.45
27	土師質 土鍾	" G7	流路2	6	6 b-2	長3.4 直径1.05~1.1 孔径0.3~0.4
28	土師質 揺り鉢	" H8	流路2	6	6 c-2	残高3.1
29	土師質 土埴	" H9	流路2	6	6 a-1	残高2.0
30	青磁 碗	" N11	流路2	6	5 d-8	口径推10.8 残高3.8
31	青磁 碗	" O11	流路2	6	5 d-9	残高1.45 高台径7.0
32	瓦器 碗	" H8	流路2	6	6 c-6	残高1.45 高台径3.5
33	瓦質 甕 淡焼	" F8	流路2	6	6 a-5	測定不可
34	瓦	" H8	流路2	6	6 c-7	厚2.15
35	瓦	" F8	流路2	6	6 a-6	厚1.7
36	瓦質 羽釜	" K3	流路3	7	6 e-2	口径推22.4 口径推26.1 残高4.3
37	瓦質 羽釜	" I4	流路3	7	6 e-3	口径推22.5 口径推27.85 残高7.1
38	瓦質 羽釜	" I6	流路3	7	6 e-1	口径推27.0 口径推32.6 残高5.9
39	土師質 羽釜	" J4	井戸	8	6 e-4	口径推18.1 口径推23.6 残高5.6
40	陶磁器 碗	" N10	水路	10	6 d-1	残高3.55 高台径推4.6
41	陶磁器 碗	" N10	水路	10	6 d-2	残高2.3 高台径推4.6
42	陶磁器 碗	" N10	水路	10	6 d-3	残高1.7 高台径4.7
43	陶磁器 碗	" O12	水路	10		残高1.5 高台径推4.6
44	瓦当	" N10	水路	10		厚1.8
写真 の み の 分	須恵器 杯蓋	" F10	流路1		5 a-2	測定不可
	須恵器 杯蓋	" F10	流路1		5 a-3	測定不可
	瓦質 羽釜	" F10	流路1		5 a-8	測定不可
	フイゴ羽口	" J10	流路2		5 c-3	測定不可
	弥生土器 甕	" L10	流路2		5 d-1	測定不可
	須恵器 杯蓋	" N11	流路2		5 d-2	測定不可
	土師質 羽釜	" F6	流路2		6 a-2	測定不可
	石権(?)	" G6	流路2		6 b-1	測定不可
	フイゴ	" G6	流路2		6 b-3	測定不可
瓦	" G6	流路2		6 c-8	測定不可	

写真図版





a. 調査区遠景 (南東上空から)



b. 調査区全景 (南西上から)



a. 流路1全景(南東から)



b. 流路2全景(南東から)



c. 石列1(石)と井戸(東から)



d. 石列2 全景(北西から)



e. 石列2 全景(南から)



a. 石列2 近景(東から)



b. 落ち込み(左)と石列2(右)(北から)



c. 井戸全景(東から)



d. 段落ち部および土手断面(南東から)



e. 水路全景(南東から)



a. 北東側掘溝全景(南から)



b. 西側掘溝全景(南から)



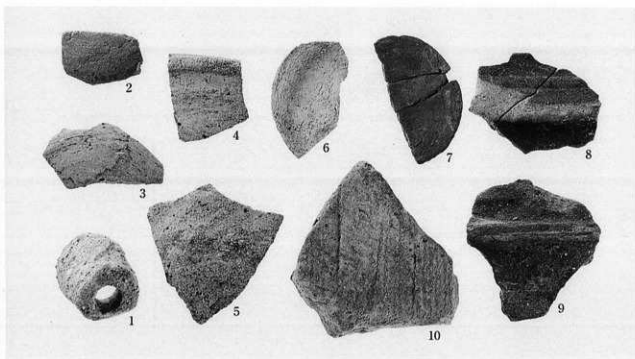
c. 試掘 東その3(上)、東その2(下)トレンチ全景(北から)



d. 試掘 東その3トレンチ全景(北から)



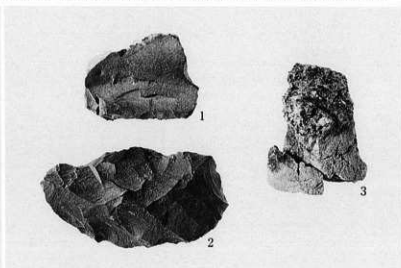
e. 試掘 東その2トレンチ全景(北から)



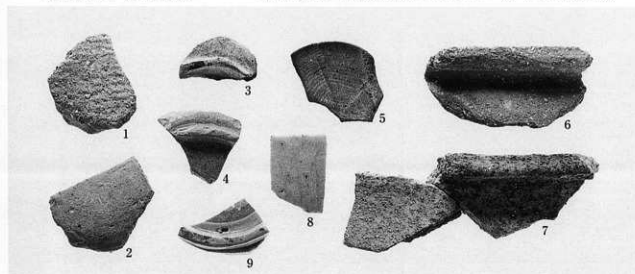
a. 流路1出土 弥生土器高杯(1) 須恵器杯蓋(2・3) 須恵質ねり鉢(4・5) 土師器小皿(6・7) 瓦質羽釜(8-9) 瓦(10)



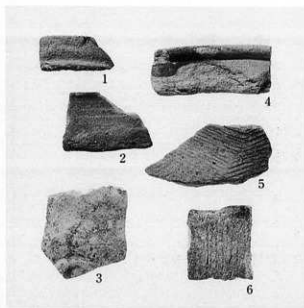
b. 流路2出土 弥生土器高杯



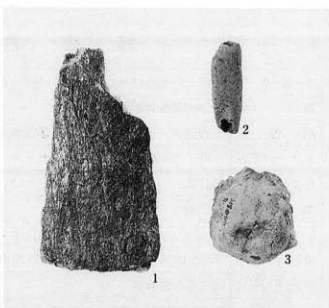
c. 流路2出土 不定形刃器(1) スクレイパー(2) フイゴの羽口(3)



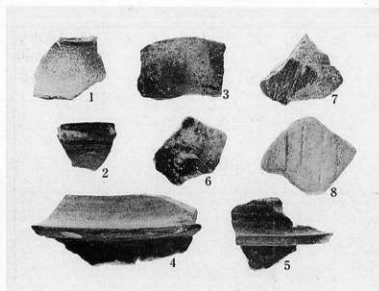
d. 流路2出土 弥生土器甕(1) 須恵器杯蓋(2) 黒色土器碗(3) 須恵器杯(4) 土師器小皿(5) 土師質羽釜(6・7) 青磁碗(8-9)



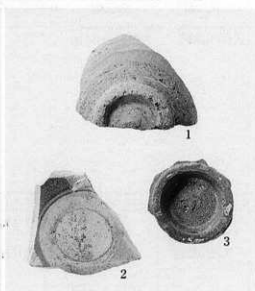
a. 流路2北側流路出土 土師質埴・羽釜(1・2) 瓦器輪(3) 漆焼夷(4・5) 瓦(6)



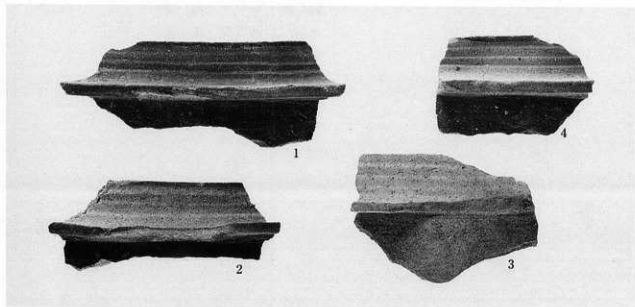
b. 流路2南側流路出土 石棒(1) 土師質土師(2) フイゴ(3)



c. 流路2南側流路出土 須恵器高杯(1) 土師質埴・摺り鉢(2・3) 瓦質羽釜(4・5) 瓦器輪(6) 瓦(7・8)



d. 水路出土 陶磁器輪(1~3)



e. 流路3出土 瓦質羽釜(1~3)、井戸出土 土師質羽釜(4)

報 告 書 抄 録

ふりがな	くぼたいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	久保田遺跡発掘調査報告書
副書名	一般国道26号線第二阪和国道建設事業に伴う発掘調査報告書
シリーズ名	(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書
シリーズ番号	第47集
編著者名	西口陽一・服部美都里
編集機関	財団法人 大阪府文化財調査研究センター
所在地	〒536-0016 大阪府大阪市城東区蒲生2丁目11番3号 小森ビル4F
発行年月日	1999年8月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'〃	東経 °'〃	調査期間	面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
くぼたいせき 久保田遺跡	おおさかふくふく 大阪府阪南市 自然田内地	27232	44	34°	135°	96.4~96.11 試掘	2,475	一般国道26号 線第二阪和国 道建設事業に 伴う調査
				20'	15'	96.12~97.3 本調査		
				54°	38°			

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
久保田遺跡	自然地形	鎌倉時代～	自然流路 石列・井戸 落ち込み 段落ち 水路 溝	石 棒(?) スクレイパー 弥生土器 土師器 須恵器 瓦質土器 黒色土器 陶磁器 瓦	